

1. はじめに

近代オリンピック大会は、1896年にギリシア・アテネで第1回大会が開催された。大会は、古代ギリシャのオリンピアで約1200年にわたって催されたとされる古代オリンピア競技会に着想を得て、クーベルタンが復興を計画し、1894年パリ・アスレチック会議において計画を進めることが可決されたものだった。クーベルタンは、若者がスポーツを通じて肉体と精神の調和のとれた発達をめざすとともに、スポーツによる国際交流をおこなうことによって世界の平和にも貢献するという理想（オリンピズム）を掲げていた。国際オリンピック委員会(IOC)は、彼の理想を時代や国際状況に応じて改変しながら引き継ぎ、この理想の追求のためには、オリンピックは政治と無関係である、政治的中立性を保つべきである、という見解を示してきた。

オリンピックの政治的中立性は、クーベルタンの理想に基づくところもあるが、より現実的な視点で考えると、100年以上の歴史を持つ世界最大規模の大会を継続するためにはやむを得ない立場であるとも言える。それでも実際には、近代オリンピック大会における政治的な出来事は後を絶たない。戦争による大会の中止、敗戦国に対する参加拒否、政治的対立や政治的駆け引きをはらんだ国や地域の参加承認、不承認、ボイコット、人種問題を理由とする招待取り消しや国内オリンピック委員会(NOC)の不承認・・・どの大会も政治の舞台となってきたと言っても良い。2008年北京オリンピック大会の聖火リレーにおける「チベット問題」は記憶に新しい出来事である。この出来事は聖火採火式で「国境なき記者団」が中国に対しチベット住民に対する人権問題について抗議したことにはじまり、聖火リレーへの影響だけでなく、開会式ボイコットの呼びかけや抗議行動への賛同を公に示した選手に対する処分問題にまで波及した。

そこで、本研究では、ベルリンオリンピックに着目し、聖火の導入過程を明らかにすることを目的とした。本研究で明らかになる事実は、必ずや現代のオリンピックに示唆を与える可能性を秘めていると考えたからである。

本研究には様々な先行研究の検討が存在する。例えば以下の3点が挙げられる。

- 1) ダフ・ハート・デイヴィス、岸本完司訳、1988年、「ヒトラーへの聖火

ーベルリンオリンピック」、東京書籍。

2) 井上俊・菊幸一、2012年、「よくわかるスポーツ文化論」、ミネルヴァ書房。

3) 結城和香子、2014年、「オリンピックの光と影—東京招致の勝利とスポーツの力」、中央公論。

上記の代表的な先行研究をはじめ、様々な研究が存在する。本研究では、上記の先行研究を参照しつつ、現代のオリンピックと照らし合わせることを課題としている。したがって、本研究では、詳細まで掘り下げられた、先行研究をまとめることが第一であろう。それが本研究の研究手法となる。その後、考察を加えてみたい。

2. ベルリンオリンピック

1936年に前回は大きく上回る49の国と地域が参加し第11回夏季ベルリンオリンピックが開催された。このオリンピックは当時政権を握っていたアドルフ・ヒトラー率いる国家社会主義ドイツ労働者党、通称「ナチス」の政権下で行われ、大きなプロパガンダ効果とユダヤ人に対する差別問題があった。それは、「ユダヤは民族であるが、その人種の中核はまったく単一的なものというわけではない。にもかかわらず、民族としてのユダヤは特殊で固有な特徴を持ち、地球上のあらゆる民族と一線を画している。」とヒトラーは考え、様々なユダヤ人、共産主義者に対する迫害が行われていた。¹

第二次世界大戦の勃発後、ナチス内部には「ヨーロッパにおけるユダヤ人問題の最終的解決」を行おうとする動きが強まり、ドイツ国内や占領地のユダヤ人を拘束し、強制収容所に送った。収容所では強制労働を課すことで労働を通じた絶滅を行い、また、占領地に設置された絶滅収容所においては銃殺、人体実験、ガス室などの直接的な殺害も行われた。その中でもドイツ国内最大の被害が出たのがアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所である。この収容所はユダヤ人を絶滅させようと考えたヒトラーが建設したものでガス室や人体実験が行われ、人として扱われない生活が続いた。アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所での被害者は約600万人ともいわれている。しかし、ユダヤ人が多いイギリスやアメリカ、そして開催地の地位を争ったスペインなどが、開催権の返上やボイコットを行う動きを見せていた。これに対してドイツ政府は、この大会を開催したいがために、大会期間の前後に限りユダヤ人に対する迫害政策を緩めることを約束した他、ヒトラー自身も、有色人種差別発言、特に黒人に対する差別発言を抑えるなど、国の政策を一時的に変更してまで大会を成功に導こうとした。実際に、オリンピッ

ク開催の準備が進められる中、それまでドイツ中に見られていた反ユダヤ人の標語を掲げた看板は姿を消し、ユダヤ系の選手の参加も容認された。併せて反政府活動家が収監されていた収容所の規則は一時的に緩められた他、一部の反政府活動家は国外へ出国できる（事実上の亡命の容認）こととなった。この様なドイツ政府の「変節」を受けて、開催ぎりぎりのタイミングで開催権の返上案は撤回され、また、国内からのボイコットの要望が根強かったイギリスやアメリカも参加することを決意した。

この大会はのちに「ヒトラーのオリンピック」と称され、以後のオリンピックにも大きな影響を与えるものだった。

ベルリンオリンピックはもともと 1916 年に第 6 回オリンピック大会の開催が決定していた。大会は多くの準備が進められ、建設された 3 万 5000 人収容のスタジアムが開く当日第一次世界大戦が勃発し幻となってしまった。

ヒトラーは当初オリンピックを「ユダヤ人とフリーメイソンの発明」とみなし、「ユダヤ主義に汚れた芝居など、国家社会主義の支配するドイツでは上演できないだろう。」と非難していた。ⁱⁱヒトラーはオリンピック開催に前向きでは無かったが、ドイツのスポーツ科学者であるカール・ディームに「オリンピックの開催は国威発揚の場となり、大きなプロパガンダ効果が期待できる。」と後押しされ開催へ向け周到な準備が始まった。その背景には、ヒトラーによるユダヤ人迫害や、第一次世界大戦に敗北したことによる国土の荒廃、経済危機の問題があり、国際世論も良い評価では無かったためヒトラーの権威やナチスを宣伝するための世界的なイベントを必要としていた。そうしたなかでオリンピックは格好の場として利用された。

大会は巨大スタジアム建設や 40 か国に及ぶ広報活動、開会宣言時の儀式性など異例のスケールで開催された。ⁱⁱⁱその中でも最もドイツが重要視したものが初実施となる「聖火リレー」である。聖火リレーはカール・ディームが発案したものでギリシャからドイツを 3075 名のランナーが 1 キロずつ走るもので、綿密なルート調査が行われた。^{iv}この聖火リレーこそプロパガンダの大きな要因であり、ドイツにとって大きな意味を持つものになった。何故なら「聖火リレー」で使われたコース調査の結果は 1893 年に勃発した第二次世界大戦時ドイツ軍が侵攻を行う際調査ルートを逆進する形で侵攻したと言われ、オリンピックが政治利用された大きな出来事となった。^v

聖火リレーの他にも当時まだ多くの国では開発段階であったテレビジョンによる中継が試験的に行われ、競技報道においても大毎・大朝の争いは熾烈を極め、国際電話取

材、飛行機によるフィルム送付、実験的ながら画像電送機（ファクシミリ）が登場した。

今大会は女流映画監督のレニ・リーフェンシュタールによる2部作の記録映画である「オリンピア」が撮影された。この作品は1938年のヴェネツィア国際映画祭で金賞を獲得する等各方面で絶賛されて、不朽の名作とされている。

この大会はのちに「ヒトラーのオリンピック」と称され、以後のオリンピックにも大きな影響を与えるものだった。今大会はこれまでにない華麗なもので、現代のオリンピックの原型になった。しかし、ヒトラーはプロパガンダのために人種差別や軍国主義を隠蔽し、世界各国の関係者やマスコミに平穏で豊かなそして優秀であるドイツというイメージで惑わしていた。これはオリンピックを利用して得たイメージであり、聖火リレーはそのイメージを植え付ける代表的なものだった。

3. 現在のオリンピック

ここまで、ベルリンオリンピックにおける聖火の導入過程をおってきた。では、現在では、そのような聖火をどう受容したのであろうか。ソウルオリンピック、北京オリンピックに着目してみたい。

ソウルオリンピックは1988年に159の国と地域が参加し開催された第24回夏季オリンピックである。ソウルオリンピックでも開会式の聖火点灯は行われた。聖火はオリンピックと平和の象徴であり、過去と現代をつなぐ事を意味しギリシャからリレーで開催地まで運ばれる。ソウルオリンピックでは聖火点灯時平和の象徴である鳩が放たれた。オリンピック憲章では「聖火への点火に続いて、平和を象徴する鳩が解き放たれる」となっている。本来点火後に放たれる予定だったが点火前に放してしまったため、何羽かが聖火台にとまってしまった。そのまま点火してしまったため鳩を焼いてしまった。平和の象徴である聖火が同じ平和の象徴として放たれた鳩を死なせてしまった問題は世界にも中継され、史上最悪の開会式と呼ばれるようになった。しかし何故順番のミスが起きてしまったのか？

韓国では1979年に大統領暗殺事件が起き、GDPが減少していた。そこにオリンピック開催のチャンスがあり、韓国側としては国を立て直す舞台として利用したかった。しかし、インフラ整備も自力で行えず、日本からの10億ドルの援助を受け開催に至った。オリンピック成功よりも自国の評価を第一に考えたため多くの事が粗末になり、開会式での聖火点火時に事故は起きてしまったと考えられる。ソウルオリンピックは他にも数

多くの問題が起きている。例を挙げると、開催中の前半あまりに観客動員数が悪かったためIOCから注意を受ける、メインスタジアムに開催国の国旗を掲揚できなかった唯一の国、日本選手へのすさまじいブーイング、ゴールした松野明美（10000m）を大会役員が突き飛ばす、柔道の判定がおかしすぎるので、「日本、フランス、オーストラリアその他各国」で抗議文を出す、韓国人選手への露骨なホームデジション、ボクシング乱闘事件と決勝判定疑惑などの問題が挙げられる。ボクシングの事件はソウルオリンピックの象徴とされオリンピック史上一番の事件と呼ばれている。

北京オリンピックは2008年に204の国と地域が参加し開催された第29回夏季オリンピックである。北京オリンピックの開会式では多くの人々による踊りや楽器演奏、そして花火による多くの仕掛けが用意された。環境汚染が開催前から問題となっており、選手たちが最終調整を日本で行うなど、IOCからも対策を要請されるほどであった。環境対策に力を注いだが開会式が行われた約5時間の中に多くの花火がスタジアム周辺や北京市内で挙げられた。中でも聖火点灯時は多くの花火が上げられ、聖火の炎よりも目を引く形になった。他にも聖火リレー時に中国側のチベット民族に対する武力弾圧に諸外国で抗議の声が上がった。チベット民族への人権問題への関心が世界各国で高くなり、欧州を中心に開会式への不参加の表明や米国では影響力の強い人々がメディア等を通じボイコットを呼びかけたりした。

北京大会では環境問題だけでなく選手が口にする食品にも問題が向けられた。大気汚染と食品の安全性は密接な関係として問題視され、米国チームを中心に食品を自国から持ち込み、欧州25カ国が最終調整を現地ではなく日本で行なうなどの対応をした。

これらは聖火をきっかけとした問題で、ベルリンオリンピックに似ていると捉えられる。ソウル大会ではオリンピックを利用し、国威発揚を目的に開催された。北京大会ではチベット民族に対する人権問題が起こり、聖火リレーや世界各国で問題を起こした。ベルリンオリンピックだけでなくこの二つの大会も政治的な問題が起こり、現在のオリンピックの政治的問題を明らかにしていると考えられる。

4. おわりに

現在のオリンピックでも政治的問題は絶える事なく続いている。2020年に開催が決まった東京オリンピック。日本でもオリンピックの熱が高まっているが、新国立競技場やエンブレム、予算の問題等様々な報道が飛び交っているが何故国はここまで壮大なオ

オリンピックを開催しようとしているのか？

日本は世界でも有数の先進国で経済的にも安定した国である。しかし、東日本大震災やそれに伴う原発事故による放射能汚染、長期にわたる経済不況で日本 GDP は第 2 位から第 3 位へと下落し、世界各国の評価は厳しいものになっている。そこで日本を立て直すためにオリンピックを利用しようと考えた。東京オリンピックが壮大なスケールで成功すれば日本の国威発揚になり、経済面、安全面共に回復した事を世界へ発信する事ができる。

これはオリンピックを利用して世界へ発信するものでベルリンオリンピックと似ている形となる。しかし、JOC の理念では、「JOC の使命は、すべての人々にスポーツへの参加を促し、健全な肉体と精神を持つスポーツマンを育て、オリンピック運動を力強く推進することにある。オリンピックを通じて、人類が共に栄え、文化を高め、世界平和の火を永遠に灯し続けることこそ、JOC の理想である。」となっている。

以上の検討の結果は、以下のようにまとめることができよう。現在のオリンピックは、従来のオリンピズムとは、歴史を経るごとに大きなズレが生じていることがわかった。国威発揚やプロパガンダをする場としては世界的イベントなので格好の場となるが、国の政治的問題が介入する事で競技にも支障が出る事は明白である。実際に数々のオリンピアン達が競技結果が納得いく結果にならず帰国するとバッシングを浴びてしまい、苦しみの果てに自殺をしてしまう選手もいる。そのプレッシャーがドーピングや八百長などの新たな問題を生むことになっている。数々のアスリートがオリンピックを目指している中、国の事情で左右される事はスポーツイベントとしてオリンピックでは無くなっていると考えられる。スポーツイベントを国威発揚の場としてではなく、古代オリンピックの理念がそうであるように、アスリート一人ひとりの集大成を魅せる場として利用されるべきなのである。

5. 今後の課題

本研究で近代オリンピックはベルリンオリンピックから始まり、聖火の導入やそれをオリンピックがどう受容したのか、オリンピックは開催国の意思で容易に政治的利用され、人権問題や経済問題等多くの問題があり、それが国民には隠された形で開催されている事が分かった。オリンピックは世界で一番規模の大きなスポーツイベントである、この規模のイベントをこれから先も開催するためには政治的な立場や人権問題が起こ

ってしまうこともやむを得ない。オリンピックが政治的中立性を保ちながら、世界最大規模のスポーツイベントとして継続していく方法を明らかにすることを模索していきたい。それが今後の課題である。

i アドルフ・ヒトラー著、立木勝訳、2004年、「ヒトラー第二の書」、成甲書房、340頁

ii ダフ・ハート・デイヴィス、岸本完司訳、1988年、「ヒトラーへの聖火ーベルリンオリンピック」、東京書籍、14頁。

iii 井上俊・菊幸一、2012年、「よくわかるスポーツ文化論」、ミネルヴァ書房、45頁

iv ダフ・ハート・デイヴィス、岸本完司訳、1988年、「ヒトラーへの聖火ーベルリンオリンピック」、東京書籍、131頁

v 井上俊・菊幸一、2012年、「よくわかるスポーツ文化論」、ミネルヴァ書房、45頁

要約

本研究では、ベルリンオリンピックに着目し、聖火の導入過程と、現在ではそのような聖火をどう受容したのであろうか。ソウルオリンピック、北京オリンピックに焦点を合わせて考察することを目的とした。

本研究は先行研究を参照しつつ、現代のオリンピックを考察した。本研究の結果から、現在のオリンピックは、従来のオリンピズムとは、歴史を経るごとに大きなズレが生じていることがわかった。国威発揚やプロパガンダをする場としては世界的イベントなので格好の場となるが、国の政治的問題が介入する事で競技にも支障が出る事は明白である。実際に数々のオリンピック選手が競技結果が納得いく結果にならず帰国するとバッシングを浴びてしまい、苦しみの果てに自殺をしてしまう選手もいる。そのプレッシャーがドーピングや八百長などの新たな問題を生むことになっている。数々のアスリートがオリンピックを目指している中、国の事情で左右される事はスポーツイベントとしてオリンピックでは無くなっていると考えられる。スポーツイベントを国威発揚の場としてではなく、古代オリンピックの理念がそうであるように、アスリート一人ひとりの集大成を魅せる場として利用されるべきなのである。

キーワード

オリンピック

聖火

聖火リレー

ベルリンオリンピック

ヒトラー

プロパガンダ

人権問題

北京オリンピック

ソウルオリンピック

スポーツイベント